広徳中学校

令和3年5月28日（金）　第7号

3学年通信

学校で、１人１台タブレットを使用できることになりました。今週は、３年生皆で、タブレット設定の準備をしました。いよいよ、パソコン室だけでなく、教室でも様々な教科でタブレットを使用して、学習ができることになりました。

タブレットを使用する学習で身につけていきたいことは、自分で考え自分で調べ、疑問や課題を自分の力で追究していく力です。どんな情報にアクセスしていくのかも自分で考えねばなりません。中学校生活での大切な時間は限られています。つまらない情報を追いかけてばかりいて時間を無駄にしないようにしましょう。より良い情報を選び手に入れ、よりよく考えていきたいものです。

○ 生活ノートから

今日は、社会のときに日清戦争と日露戦争についてやりました。意外と最近のことなので、ほんの少し興味がありました。戦争は嫌ですが、戦争で決めるしかなかったのだなと思いました。戦争の勝敗は決まっても、亡くなってしまったたくさんの命は戻ってきません。これを忘れずに学んでいきたいです。

今日は、放課後に学年集会の原稿を作りました。書くよりパソコンで打ったほうが早いので、パソコン室でＡさんと一緒にやりました。私たちは、他の委員会より少し出る回数が多い気がします。「データが残っているから、来年の校風と整美は楽だね」とＡさんが言っていました。２人で相談しながら原稿を完成させ、約２分間のスピーチ原稿ができました。

今日は、６時間目に体育がありました。今回からハードル走ではなく、走り幅跳びをしました。走り幅跳びは、靴に砂が入るし、あまり得意ではないので、やりたくありませんでした。しかし、いざやってみると、フォームが結構きれいにできてよかったです。助走も、２１，７mにすることで、歩幅を合わせることができたので良かったです。よりよい記録が出るようにより工夫していきたいです。

○ 来週の予定

日	曜	1	2	3	4	5	6	給食	清掃	行 事 等	下校時刻
31	月	17	18	19	20	21	学	○	○	校長講話	15:45（一般） 18:00（完全）
1	火	34	35	36	37	38	生	○	○	生徒集会・全校応援練習 学校集金引き落とし日	16:25（一般） 18:45（完全）
2	水	壮	42	41	40	39	／	○	×	中体連夏季大会壮行会 尿検査①・部活動写真撮影	15:30（一般） 17:30（完全）
3	木	総	43	44	45	46	47	○	○	壮行会予備日 尿検査②・部活動写真撮影	16:25（一般） 18:45（完全）
4	金	49	50	53	54	51	52	○	○	壮行会予備日 部活動写真撮影予備日	16:25（一般） 18:45（完全）
5	土	北信陸上									
6	日										

☆学年通信は、学校のホームページでもご覧になれます。

☆6月１日（火）は学校集金引き落とし日となっております。よろしくお願いいたします。

読書のすすめ（この文の時代背景は、終戦後間もない1945～48年頃です。）

【かくれんぼ】

寺山　修司

故郷がアメリカ人たちに押収され、母がベースキャンプに働きに出るようになってから、私はどういうものか「かくれんぼ」という遊びが好きになった。

帰りの遅い母を待つ間の退屈さ、「鬼畜米英」のベースキャンプへ就職して、（しかもメイドというきわめて低い階級の労働に甘んじている母への）近所の人たちの陰口、悪い噂などに抗しかねて、「かくれたい」と思ったのかもしれない。母は、父の死後しばらくは呆然として、精薄のように見えたが、思い切ってベースキャンプの求人広告「戦争未亡人優遇す」に応募してからは、髪を染めたり、豊頬手術をしたりして若返っていった。

そして、取り残された私はわけもなく「かくれずには、いられない」心境に達し十四歳にもなって「かくれんぼ」遊びに熱中するようになったのである。

一体、私にとって「かくれんぼ」とは何だったのだろうか？

農家の納屋の入口で年下の子六人とじゃんけんをしてぱっと散り、納屋の暗闇のわらの中にかくれてじっと息をつめていると、いつのまにかうとうとと眠ってしまい、目をさますと戸口の外に雪が降っている。かくれたときは、たしか春だったような気がするがと、ぼんやりしていると、見つけたぞ、見つけたぞと言いながら入ってくる鬼の正ちゃんがいつのまにか大人になっていて、背広を着て、小脇に赤児を抱いている。その「見つけたぞ、見つけたぞ」という声ももう、立派なバリトンになっていて、かくれんぼのあいだに十年以上の月日が流れてしまったという幻想に取りつかれている。

べつの日私は鬼であった。

子どもたちはみな、かくれてしまって私がいくら「もういいかい、もういいかい」と呼んでみても、答えてくれない。夕焼けがしだいに醒めていき、紙芝居屋も豆腐屋ももう帰ってしまっている。誰もいない故郷の道を、草の穂をかみながら逃げかくれた子どもたちをさがしてゆくと、家々の窓に灯がともる。

その一つを覗いた私は思わず、はっとして立ちすくむ。

灯の下に、煮える鍋をかこんでいる一家の主人は、かくれんぼして私から「かくれていった」老いたる子どもなのである。かくれている子どもの方だけ、時代はとっぷりと暮れて、鬼の私だけが取り残されている幻想は、何とむなしいことだろう。

私には、かくれた子どもたちの幸福が見えるが、かくれた子どもたちからは、鬼の私が見えない。

私は、一生かくれんぼ鬼である、という幻想から、何歳になったらまぬがれることが出来るのであろうか？